

武蔵野日曜集会 創立54周年記念祈祷会

棄身の愛

——ヨハネ5、7、21、ヨハネ一、詩篇27——

1994年9月25日

小池辰雄

聖書は私が書いた本だよ どん底の無 「エホバ」を「キリスト」に置き換える 天来の愛は最大の力 祈り

【ヨハネ5、7、21】

「19 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。』」(ヨハネ5・19)

「16 イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。』」(ヨハネ7・16)

「25 イエスの行い給いし事は、この外な^{ほか}お多し、もし一つ一つ録^{しる}さば、我おもうに世界もその録すところの書を載するに耐えざらん。」(ヨハネ21・25)

【ヨハネ一4】

「7 愛する者よ、われら互に相愛^{あい}すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。8 愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。9 神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子^{ひとりご}を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10 愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥^{なだ}めの供物^{そなえもの}となし給いし是なり。11 愛する者よ、斯^{かく}のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛^{いま}すべし。12 未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在^{いま}し、その愛も亦われらに全うせらる。未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在^{いま}し、その愛も亦われらに全うせらる。13 神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。」(ヨハネ一4・7・13)

【詩篇27】

「1 エホバはわが光、わが救なり。われ誰をおおそれん。エホバはわが生命のちからなり。わが懼^{おそ}るべきものはたれぞや。

2 われの敵われの仇^{あだ}なるあしきもの襲いきたりてわが肉をくらわんとせしが



蹴つまづきかつ仆れたり。

3 縦たといいくさびと宮をつらねて我をせむるともわが心おそれじ。たとい戦おこりて我をせむるとも我になお恃たのみあり。

4 われ一事ひとつことをエホバにこえり我これをもとむ。われエホバの美うるわしきを仰ぎその宮をみんながためにわが世にあらん限りはエホバの家にすまんとこそ願うなれ。

5 エホバはなやみの日にその行宮かりいおのうちに我をひそませその幕屋のおくにわれをかくし巖いわおのうえに我をたく置きたもうべければなり。

6 今わが首しうべはわれをめぐれる仇のうえに高くあげらるべし。この故にわれエホバのまぐやにて歓喜よろこびのそなえものを献げん。われうたをうたいてエホバをほめたたえん。……

10 わが父母われをすつるともエホバわれを迎えたまわん。」(詩篇27・1〜10)

●聖書は私が書いた本だよ

今、読んだ詩篇27篇のところは私の気持でもあります、私の気持は――これは旧約ですから、これを新約の角度から――もう一つ上の次元にいますけれども。「エホバ」という代わりに私には「キリスト」です。

「キリストはわが光、わが救なり。我たれをかおそれん」

という。聖書は、

「……であらん」

という蓋然がいぜん的な言葉や未来的な表現は全部、現在で読む方がいい。三人称は二人称にして読む。

「神―キリスト―我」

という直接関係の気持で読まないと、力にならない。

「聖書は私が書いた本だよ」

と、自分でそう思うくらいにならないければダメです。

「キリストはわが光、わが救」

と、正にそのとおりです。主語はキリストなんです。自分ではない。「わが光、わが救」は述語なんです。

「わが光、わが救はキリストなり」

ではない。「キリストは」なんです。福音を本当に受けとるためには、キリストが主格になつていなければダメです。述語ではダメなんだ、主語でなければ。正に、

「主キリスト」

です。これは主格なんです。



天来の言葉であり、天から言いかけている言葉です。「祈り」というのは、こつちからお願ひするのが祈りだけれども、本当の祈りは、キリストの祈りを反射する祈りなんです。キリストの宣言、

「我汝を愛す」

とある。ヨハネ第一書4章に、

「⁷愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、

「愛はキリストより出づ」ということ。

おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。⁸愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。⁹神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。

それが神さまの愛だと。キリストから生命をいただいた。十字架の贖いを土台とした聖霊の生命、これは圧倒的な神の恵みですから。こつちの願ひではない。

¹⁰愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、

「キリストわれらを愛し」ということ。

その子を遣して我らの罪のために宥めなだの供物そなえものとなし給ひし是なり。

これが愛だと。

¹¹愛する者よ、斯かくのごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがい相愛すべし。

「互いに己を棄ててかかれ、棄身の愛であれ」

ということです。

「人その友の為に生命を棄つる、これより大なる愛はなし」

という言葉があるでしょ。

¹²未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在いまし、その愛も亦われらに全うせらる。未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在いまし、その愛も亦われらに全うせらる。¹³神、御霊を賜ひしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。」(ヨハネ一4:7-13)

全くその通りですね。「神」といえば、その背後には「キリスト」がいたもう。「キリスト」といえば、その背後に「神」がある。神さまとキリストとを離してはダメです。

「キリストは正に十字架にかかつて贖いをして、そして今度は聖霊を与える」

という、十字架の贖いと聖霊という驚くべき愛です。愛の実質はそうなんです。それが愛の内容です。

●どん底の無

「敵を愛せよ」



とキリストも言われたけれども、私にはもう敵はない。敵というものを持つていうちはダメなんです。どんな人も敵でない。向こうがこつちを敵視しようが、そんなことはどうでもいい。それがど**ん底の無の境地**です。ど**ん底の無の世界**にはいると、敵がいなくなる。「天下無敵」とはそのことなんです。強いから無敵ではない。敵というものがないんだ、世界中の人はみな兄弟姉妹だということ。十字架上のキリストが、

「**彼らは為すことを知らず、赦してやってください**」

と仰った。これが本当の愛だ。十字架にかけられながら、そう仰った。キリストは正に棄身の愛なんだ。身を棄てている。相対的現実ではキリストは十字架に架けられた。しかし、キリストは十字架にかからないでいきなり天界に行けたんだ。あれは自ら棄てた。

「**我自ら棄つるなり**」

という。それは贖いのため、イザヤ書53章の預言の成就のためです。大変なひとです。黙つてキリストを冥想してごらんさい、もう、言いようがないですから。平伏すよりかしようがない。平伏すと、今度はもの凄い力がくる。聖霊の力がくる。

私がありがたくてしようがないね。だから、自分の信仰なんて全然考えない。キリストの愛に圧倒されて生きているんだから。

「私には信仰なんかありません。ただキリストに圧倒されて生きているだけのはなしです」

というわけです。普通のクリスチャンは

「自分の信仰はどうだこうだ」

と、一生懸命に自らを顧みている。何になるかね、顧みて。私のような境地は普通の牧師さんは持つていないだろうな。

キリスト一切だからね、小池なんてものもうここ（十字架）でもつてめっちゃめっちゃになっている。この（聖霊の）中に入れられている。自分で入るのではない。キリストが入れてくださった。ぎゅーっと上から来て、

「お前は私の中に入れ」

と。これがキリストの愛です。だから、さっきから言っているように、私は、信じ仰ぐなんていう「信仰」という言葉は嫌いだ。キリストが引っぱり込んだんだ。無を賜ったんだ、平伏しを賜ったんだ。

キリスト自身は神さまの前に平伏しているひとです。地上におけるイエスは、平伏して自分は何者でも無くなつてしまっている。無者なんだ。だから、

「**我を見し者は父を見しなり**」

「無者だから私の中に神さまが入ってきたから、私を見た者は神さまを、父を見たのだ」

ということですよ。



「私は何も言えない、何もできない」

と、キリストはヨハネ伝ではつきり言っている。

「¹⁹イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。』」(ヨハネ5・19)

「¹⁶イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。』」(ヨハネ7・16)

とあるでしょ。

キリストに直結したパウロ、ペテロ、ヨハネ、これにはよく親しんでくださいよ。聖書は親しむ本なんでね、絶対に研究する本ではない。聖書研究会なんて私は大嫌いだ。かえって聖書から遠くなる。

●「エホバ」を「キリスト」に置き換える

詩篇27篇にもどります。

「²われあだの敵われの仇なるあしきもの襲いきたりてわが肉をくらわんとせしが蹴つまづきかつ仆れたり。

ところが、敵がいなくなつてしまった。旧約を乗り越えてしまった。

⁴われいとつと一事をエホバにこえり我これをもとむ。われエホバの美しきうわを仰ぎその宮をみんながためにわが世にあらん限りはエホバの家にすまんとこそ願うなれ。

キリストです、これは。

「われ一事を神さまに請えり。キリストの美しきを仰ぎ見、キリストという活ける宮を見んがためにわが世にあらん限りはキリストの中に住まんとこそ願うなれ」ということ。旧約の奥を新約で読んでいく。

⁵エホバはなやみの日に

キリストという、

その行宮かりいおのうちに我をひそませその幕屋のおくにわれをかくし巖いわのうえに我をたかく置きたもうべければなり。

というように読んでいく。あとずつと14節まで全部これをキリストに置き換えると凄い言葉になる。

⁶今わが首こうべはわれをめぐれる仇あだのうえに高くあげらるべし。この故にわれエホバのまぐやにてよろこび歡喜のそなえものを献げん。われうたをうたいエホバをほめたたえん。

私は詩をもつてキリストをほめ讃えます。皆さんも、そんな気持で聖書を読んでください。



表向きの文字に何もこだわらなくていい。その奥の見えざる文字を、響きをつかまえていく。

¹⁰ わが父母われをすつるともエホバわれを迎えたまわん。

「わが父母われをすつるともキリストわれを迎えたもう」と読む。

「……たまわん」

ではない。

「……たもう」

です。みな現在の、断定で読んでいく。私は現在の断定の形でなければ読む気がしない。それでは力がこないもの。

「たまわんと。果たして、たもうであろうか」

なんて、冗談じゃない。私は自分で勝手な聖書をひとつ作ろうかな。たとえば、新約聖書のそんなものを少しでも作ったら、みなは

「小池は勝手なやつだ」

と言うだろうな。勝手だって何だっていいよ、これは本当の世界だから。

●天来の愛は最大の力

「聖書はかけらだ。聖書はまだかけらだ。言わない事がまだたくさんあるんだ」

と、ルターが言った。

「神の言は盛りきれない」

と、ヨハネ伝の最後に書いてある。

「²⁵ イエスの行い給いし事は、この外なお多し、もし一つ一つ録さば、我おも

うに世界もその録すところの書を書載するに耐えざらん。」(ヨハネ21・25)

と、大変なものだ。しかし、かけらでいいんです。かけらを読んで、氷山の一角を見て、かけらでない氷山の下の大きな見えない所がちゃんと見える目を持っていなければダメです。

「全部見なければ承知しない」

ではダメです。一角を見て、全部をちゃんと透視するような目でなければ。一つの音を聞いて、その全音楽の響きを受けとるような聞き方がそれなんです。

十字架上のキリストが、

「彼らを赦せ」

と言った。キリストにも敵はいない。自分を十字架につけたやつを憐れんで、

「赦してやってください」

と言った。愛は最大の力なんです。天来の愛は最大の力です。アガペーです。そういう愛が世を救っていく。救われた者がどう思うかは知らんけれども。知らないでいるかもしれない



ない。あるいは、嘲っているかもしれない。

ところが、キリストの福音はそういう愛でもって力強く展開して、そして、相手に本当の生命を与える。烈々たるものです。とても、説明なんかできない。これはやはり身証^{しんじよう}するよりか仕方がない。聖書は身証すべき書なんです。身をもつて証^{あかし}する。これが本当の文字なんです。身証という実存が、そういう在り方が、これが本当の活字、活ける文字です。賀川先生というのはそういう人だった。藤井先生もそういう質の人でした。この二人は不思議なことに1888年に生まれている。藤井先生は1930年に仆れた。藤井先生は無教会の中で文字通りユニークな人でした。『羔羊の婚姻』という詩を書いて、惜しいことに未完成に終わった。

この凄い福音のためには、まだまだ私は簡単に向こう側に往くわけにいかない。皆さんとこういう集会をしているのが一番楽しい。それでは祈りましょうね。

● 祈り

主さま、あなたはゲッセマネの園で父なる神の前に平伏して祈られました。このゲッセマネの祈りはいつまでも歴史の終りまで続きます。私たちはすべて、この主さまの棄身のご愛を、十字架の贖いの愛と聖霊の驚くべき生命の愛をいただいて進んで参ります。

どうぞ、私たち一人びとりをその十字架・聖霊の証し人として、いよいよ鍛えまたお用いくださらんことを願ひ奉ります。我々、この武蔵野幕屋の兄弟姉妹たちは、このような福音の戦士として選びの器です。どうぞ、あなたの御名の故に選ばれたこの一人びとりを、あなたが深く、その人らしく顧みてくださるよう願ひ奉ります。

尽くしますが、心からの感謝と讃美を御名にあつて献げ奉る。アーメン。

